

サラバンド

影流れ、咳きがもれる
顔を出した湖面の波の上に

光と影の境に風が吹き
浅すぎる春は未だ襟を立てさせる

雑踏から逃れ来て寂しさを覚え
雲に打たれてこみ上げる何者か

典雅に響く旋律はよそよそしく
相反する二つの昂ぶる心にもてあそばれる

骨格だけの原風景に存在を見出し
身体を吹き抜ける頼りなさ

ひとつの枝にとまる鴉のしわがれたひと声も
空しく骨の間をすり抜けてしまう

消えては現れる陽射しの下で僕はくり返す
「何故戻って来た、何故・・・」

(1983.4.3)